

発達障害についての記述方法が幼児の 保護者の養育スタイルに及ぼす影響

長岡 千賀

Effects of description types of developmental disabilities on parental child-rearing style

Chika NAGAOKA

Otemon Business Management Review, Vol.28, No.2

発達障害についての記述方法が幼児の 保護者の養育スタイルに及ぼす影響

長岡 千賀

Effects of description types of developmental disabilities on parental child-rearing style

Chika NAGAOKA

Otemon Business Management Review, Vol.28, No.2

発達障害についての記述方法が幼児の 保護者の養育スタイルに及ぼす影響

長岡 千賀

「わが子に発達障害があるかもしれない」と保護者が気づき始めたときから専門的支援が受けられるようになるまでの間にも、保護者が適切に子どもに関わることができるように、資料等により適切な情報が提供されていることが望ましい。本研究の目的は、発達障害に関する資料上の記述方法が、幼児の保護者の養育スタイルに及ぼす影響を明らかにすることであった。幼児の保護者 200 名が実験に参加した。本実験では、言語的具体性（高／低）と関わりの記述（有／無）の 2 要因が操作された 4 種類の資料が刺激として用いられた。実験参加者は 4 種類の資料のうち 1 つを読んだ後（被験者間要因）、3、4 歳になったわが子に発達障害様の特徴があったときのことを想像し養育スタイルを回答した。共分散分析の結果、本実験で測定された相談・つきそい得点について具体性と関わりの交互作用が有意であった。またテキストマイニングの結果から、記述方法によって実験参加者の感想の内容が異なる傾向があることが示された。これらの結果は、わが子の発達障害に気づき始めた保護者が触れる各種情報の記述方法が、保護者の養育スタイルに影響することを示唆している。結果に基づき、保護者支援の文脈で有効な、発達障害に関する記述方法についての指針を提案した。

【キーワード】 発達障害、養育スタイル、言語的抽象度、テキストマイニング法

問題と目的

発達障害のある子どもをもつ家族に対する支援の必要性が、近年指摘されている（例えば、中田, 2009）。発達障害のある子どもをもつ保護者は、障害への戸惑いや、障害特性の理解や対応の困難など、さまざまな心理的ストレスを経験しやすく、支援者は、言葉を慎重に選びながら保護者に寄り添っている。そのため支援者や関連機関が発信するメッセージの言語的表現に着目することは、子育て支援の具体的手法を検討する上で重要な意味がある。本研究では、発達障害についての資料上の記述方法が、保護者の養育スタイルに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

保護者が発達障害について知る過程

保護者が「わが子に発達障害があるかもしれない」と感じたときから、専門医療機関での診療を受けるまで、そして専門的療育サービスを利用し始めるまでには、一般に大きなタイムラグがある。その間に保護者は、自治体などによる案内などを手がかりに、地域の療育センターや福祉保健センターなどの公的専門機関に相談することもあるが、自らが親同士の口コミやインターネット等で探すなどして民間の児童発達支援事業所などに着くことも多く、その割合はある政令指定都市についての調査では全体の 41% にものぼる（一瀬, 2016）。保護者は子どもが生まれるより前に発達障害について全く知らないわけではないが、自身の子どもの障害に気づき始めたときに、自らが対応するために情報収集していることがうかが

える。

そして、その学びの際に手がかりとされるのが、自治体や民間の児童発達支援事業所による口頭や紙面上の説明、あるいは、親同士の口コミやインターネット上のさまざまな言説である（一瀬，2016；山根，2019）。そしてこれらは、信頼性が高く、長期的に見て保護者の心理的ストレスのもとにならないことが望ましい。血液型のステレオタイプがそうであるように（上瀬・松井，1996）、個人の中に一度形成されたステレオタイプは後からなかなか修正されないためである。

言葉を慎重に選びながら支援にあたる実践家も多いが、発達支援業務の中で全員が十分に実践することには大きな難しさがあるのが実際のところである。また、支援の場では医療的、福祉的、教育的な多様なサービスについて情報提供されるが、まずは発達障害についての理解が不可欠であるため、発達障害についての情報提供が適切に行われる必要がある。そこで本研究では発達障害についての情報提供のための資料作成に着目する。基礎研究の成果に基づいて資料作成についての指針が提出されることによる貢献は大きいと考えられる。

資料上の具体性高低と関わりの有無の影響

発達障害についての情報提供において、説明に用いられる言葉の具体性が高いか否か（以降、「具体性」と呼ぶ）、および発達障害児者と他者とのやりとりが説明に含まれているか否か（「関わり」）が、情報提供の受け手の抵抗感を規定する

要因になることについて検討がなされている。ここで具体性は、ある人物の望ましくない行為を記述する際の記述方法に関連している。一般に、ある人物による望ましくない行為を記述する際に、その人物が自分と近い関係であれば、“A is punching B”のように、具体的な行動がポジティブ・ネガティブの評価を含まない形で記述するが、その人物が自分とは性質の異なる集団に属するときは、“A is hurting B” “A hates B”のように、ネガティブな評価を含む、抽象度がより高い表現をする（Maass, Salvi, Arcuri, & Semin, 1989; Semin & Fiedler, 1988）。また Douglas & Sutton (2006) によると、ある人物の望ましくない行為が抽象度の高い語句で記述されたとき、一般に読み手は、対象人物に対する書き手の否定的態度を読み取る。その態度に読み手が影響されることにより、対象人物についての読み手の認知が変化する可能性がある。

長岡（2018）は、発達障害についての啓発資料上の語句の具体性（高／低）と関わり（有／無）の2要因を操作した4種類の刺激（資料）を作成し、それを用いて大学生を対象に実験を行なった。資料を読んだ後の実験参加者に、資料に挙げられた特徴のいくつかを有する学生を想像させ、その学生との交流についての抵抗感を測定した。

このとき、具体性高条件と低条件の刺激は同じ状況を説明しながらも、具体性高条件では具体的な行動がポジティブ／ネガティブの評価を含まず記述されており、一方の低条件ではネガティブな評価を含む形で抽象度が高い語句で記述されていた

Table 1 刺激における記述の例（一部）

具体性高・関わり有り条件	具体性低・関わり有り条件
人とのつきあい方の特徴 ※これは特徴の一例です。 ・一人遊びに熱中する ・話しかけているのにしらんぷり ^{a)} ・スーパーなどで、親から離れてウロウロ ^{a)} ・友だちのルール違反を指摘する ・うまく友だちの輪に入れずに、孤立したり、からかわれたりする ^{b)}	人のかかわり方（社会性）の発達の問題 ※これは特徴の一例です。 ・周りの人に関心を示さない ・こちらが話しかけているのに、答えない ^{c)} ・スーパーなどで、親の近くについていることができない ^{c)} ・悪気がなく相手の気分を害することを言う ・相互的に対人関係を築くことが難しく、孤立してしまったり、からかわれたりする ^{d)}

注. ^{a)}具体性高・関わり無し条件では削除した。^{b)}具体性高・関わり無し条件では「うまく友だちの輪に入れずに、孤立する」とした。^{c)}具体性低・関わり無し条件では削除した。^{d)}具体性低・関わり無し条件では「相互的に対人関係を築くことが難しく、孤立してしまう」とした。

(Table 1)。実験の結果、具体性高の2条件では、具体性低条件に比べて、交流に抵抗が小さいことが示された。この結果は、資料の書き手の態度を実験参加者が読み取りそれに同調したことを反映していると考えられた。

また、関わり有り条件の刺激では、対象児者が他者の働きかけに対してうまく反応しない状況が記述されたが、関わり無し条件の刺激ではこの記述が削除されていた。仮説として、関わり有り条件の方が関わり無し条件よりも抵抗感が強いことが予想されたが、実験の結果は関わり有り／無しによって異なることを示した。これは、一般に人は他者がどのような行動をとるかに基づいて自分の行動の適切さを判断すること (Cialdini, Wosinska, Barrett, Butner, & Gornik-Durose, 1999) から解釈できる。関わり有り条件の読み手は、資料に描かれているように、対象児者に関わろうとすることが適切であると判断したため、自分自身も抵抗感を強めなかったと考えられた。

しかし、大学生同士の関係と保護者と子どもの関係とは質的に大きく異なる。そのため、保護者を対象とした場合に上と同じ結果が得られるとは考えにくい。そのため、子育て支援の文脈に長岡 (2018) の知見をそのまま適用することは適切ではない。

本研究の目的

そこで本研究では、幼児の保護者を対象として上記と同じ刺激を用いた実験を行い、資料上の記述方法が、養育に関わる認知や行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。この刺激に記されている項目は、青年期の事例よりも、幼児期から児童期のものが多い。そのため、幼児の保護者にとってそれらの項目をわが子に関連させることは相対的に容易であると考えられる。

養育に関わる認知や行動は、子どもの適応や発達に強く影響するものであり、子育て支援における重要な観点である。本研究では、養育に関わる認知や行動を計測するために、「養育スタイル尺度」(松岡ほか, 2011) を用いる。本尺度は、発達臨床的な支援や介入の効果測定を目指して作成

されたものであり、また発達障害の有無に関わらず普遍的に保護者の養育スタイルを測定することができる (松岡ほか, 2011; 中島ほか, 2012)。養育スタイルのうち、特に子育てに関して他者に相談しようとしたり子どもにつきそったりするスタイルは、子育て支援へのつながりやすさの指標とも言えるため、現行の子育て支援システムが親の自発的な援助要請を必要としていることを踏まえると、これに注目する必要性は高い。

また、資料を読んだ後に読み手が何に意識を向けどのように感じたかが分かれば、養育スタイルに記述方法が及ぼす影響に関して大きな示唆が得られると考えられる。そのため本研究では、資料読後の実験参加者に、資料上の言語的表現や調査全般について感じたり考えたりしたことを書いてもらい、それをテキストマイニング法により分析する。資料を読んだ後に何に意識を向けどのように感じたかに関して、条件間で比較を行い、これに基づき養育スタイルの変化のプロセスを推察する。

実験参加者は幼児の保護者であるため、養育への関心は一般的に高く、資料を読み自分の子どもを想像するように求められたとき自分の養育について意識を向けやすいと思われる。しかし、具体性低条件の実験参加者は書き手の否定的態度を読み取ることになり (Douglas & Sutton, 2006)、それに対する拒絶的反応も生じる可能性があることから、自分の養育への意識の向けやすさの点で具体性高条件と異なると予測される。また、発達障害のある子どもの保護者にとって、子どもの感情や行動を理解することの難しさはストレスになる (山根, 2013)。したがって、自分の養育に意識を向けやすい場合、関わり有り条件では、無し条件に比べて、ネガティブな評価が伴いやすいと予測される。以上をまとめると、養育スタイルに対して具体性と関わりとの交互作用があるという仮説が設けられる。本研究では得られた結果に基づき、支援に向けて有効な資料作成に関わる指針を提案することを目指す。

方法

実験参加者

民間調査会社に委託し、まずモニターを対象として、子どもの有無などを聞く Web 調査を実施した。この調査で、第1子が1歳6ヶ月から3歳未満で、その子の主たる養育を担っており、1年を超えて日本国外に居住／滞在した経験を持たないと回答し、Web 調査上の尺度項目を読まずに回答する傾向 (Krosnick, 1991; 三浦・小林, 2015) を示さず、かつ、予備調査と本実験への参加意思を示した 250 名に協力を依頼した。3 歳児検診で発達障害の可能性が指摘されることが多いこと等を踏まえ、第1子の年齢の上限を3歳未満とした。

予備調査と本実験では、この 250 名に実験関連書類が、調査会社から郵送された。予備調査と本実験の両方の有効回答を調査会社に郵便で返送したのは 216 名であった (有効回答率 86.4%)。予備調査と本実験は 2019 年 2 月から 3 月の間に実施された。

予備調査

本実験に先立って、実験参加者の養育スタイルを測定するための予備調査を実施した。実験参加者は、近い将来、自身の子どものが 3、4 歳になったときのことを想像し、養育スタイルを回答した。

養育スタイルをたずねるために、松岡ほか (2011) の養育スタイル尺度のうち、肯定的働きかけ尺度、相談・つきそい尺度、叱責尺度の 3 つの下位尺度を用いた。肯定的働きかけとは子どもに対する肯定的な関わり方であり、例えば「私の子どものいいところを具体的に 10 個程度あげることができる」などの 9 項目で測定される。また相談・つきそいとは子育てに関して他者に相談しようとしたり子どもにつきそったりすることであり、「子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談している」などの 7 項目で測定される。叱

責とは子どもに対する叱責であり、「子どもが言うことを聞かない場合、おどかしたりするような強い厳しい叱り方をする」などの 4 項目で測定される。実験参加者は各項目について「全く当てはまらない (1 点)」から「とても当てはまる (5 点)」の 5 件法で回答した。

また、実験参加者は、自身の性別や年齢のほか、発達障害のある人が身近にいるか否か、発達障害について知っている程度について回答した。知っている程度については、本研究が資料上の記述方法の影響を調べる試みであることから、「人に説明できるくらい知っている」、「人に説明できるほどには知らない」、「「発達障害」という言葉を聞いたことがなかった」の 3 項選択とし、群間の等質性を確認するために用いた。

本実験

予備実験のおおよそ 1 ヶ月後に本実験を実施した。予備調査から時間を置くことによって、予備調査での自身の回答に左右されずに回答できるようにした。

刺激 長岡 (2018) で用いられた刺激を用いた。この刺激は、広汎性発達障害についてまだ知らない一般人向けに作成された資料をもとに作成されたものであり¹、発達障害の特徴についての記述において、具体性 (高／低) と関わり (有／無) の 2 要因が操作された (Table 1)。具体性高／低条件は同じ状況を説明しながらも、具体性高条件では、具体的な行動がポジティブ／ネガティブの評価を含まず記述されている一方、具体性低条件では、抽象度がより高い語句でネガティブな評価を示しながら、対象児者の不自由さも含めて記述されている。また、関わり有り条件では、対象児者に関わろうとする他者が存在する状況が描かれている項目を含むのに対し (計 26 項目)、関わり無し条件では、そうした項目が除かれている (計 19 項目、Table 1)。この計 4 種類の刺激は、記述方法は異なっているが、それを読んだ人が想像する対象児者の性質は条件間で異なること

1 自閉スペクトラム症についての説明を主としている。作成のプロセスや操作チェックの詳細は長岡 (2018) を参照。

が確認されている（長岡，2018）。

なお、著者の校正ミスのため、具体性高の2条件の刺激中では「障害」の「害」をひらがな表記した「障がい」で統一されたが（6回使用）、具体性低の2条件の刺激中では「障がい」（5回）と漢字表記の「害」を含む「障害」（2回）が混在した。文字サイズ、フォント、イラスト、レイアウトを4条件間で統一し、A4用紙にモノクロ印刷された。

この4種類の刺激は実験参加者にランダムに1種類ずつ郵送された。実験参加者は、この刺激を資料として読むことが求められた。また、実験参加者に配布された印刷物では、この資料のあとに次節に示す質問項目が続いた。

質問項目 実験参加者は以下について回答が求められた。

（1）養育スタイル尺度：実験参加者は、資料を読んだ後、近い将来、3、4歳になったわが子が、資料に挙げられている特徴のいくつかを持っていたときのことを想像し、養育スタイルについて回答することが求められた。予備実験と同じ尺度が用いられた。

（2）資料や調査についての感想：続いて実験参加者は、資料内の文言や文章、イラストなど、および本調査のそれぞれについて、感じたり考えたりしたことがあれば自由記述するよう求められた。記入欄は項目ごとに区別され、全体でおよそA4で1ページのサイズであった。この形式は条件間で同じであった。

倫理的配慮

予備調査と本実験への参加募集にあたって、この調査は子育てに関するものであると伝え、本調査は郵送による2回の調査であり参加は任意であることや、個人情報保護方針を記し、参加への同意を得た。本研究への協力意志を確認した上で、調査会社から予備調査等関連の書類が郵送された。無記名式で回答を求めた。Web調査と予備調査と本実験の回答が対応付けられるよう、実験参加者ごとに発行されたIDで回答が管理された。本実験の回答が回収された後、デブリーフィ

ングとして実験参加者に、本研究の真の目的（資料の記述方法が養育スタイルに及ぼす影響を調べること）と、本実験において実験参加者が読んだ資料は、研究のために、実際の啓発資料が部分的に変更されたものであったことを説明した。加えて、実際に公開されている一般向けのオンライン資料のURLを伝えた。この資料の記述方法は大学生を対象とした研究結果（長岡，2018）からより良いと考えられるものであった。追手門学院大学研究倫理審査委員会の承認（受付番号2018-12）を得て本研究を実施した。

分析方法

養育スタイル 肯定的働きかけ尺度に該当する項目の合計得点を「肯定的働きかけ得点」、同様に、相談・つきそい尺度の得点を「相談・つきそい得点」、叱責尺度の得点を「叱責得点」と呼ぶ。

また以降では、本実験で実験参加者が思い浮かべた子ども、すなわち、3、4歳で、資料に挙げられている特徴のいくつかを持っているわが子を、「特徴的わが子」と呼び、一方、予備調査で実験参加者が想像した3、4歳になったわが子のことを「非特徴的わが子」と呼ぶこととする。

特徴的わが子に対する肯定的働きかけ得点について、非特徴的わが子に対する肯定的働きかけ得点を共変量にした共分散分析を行うこととした。このとき、刺激の具体性（高／低）、関わり（有／無）、および、具体性と関わりの交互作用項を独立変数とした。相談・つきそい得点、叱責得点に関しても、同様に分析した。分析に使用したパッケージはIBM SPSS Stastics ver.27であった。

感想の内容 実験参加者によって書かれた感想を分析するために、テキストマイニングの手法を用いた。テキストマイニングによって、テキストデータを計量的かつ客観的に検討できることが可能である。この手法を用いることにより、本研究では、実験参加者が資料を読んで心理尺度に回答した際に、またはその直後に、どのようなことをどのように考えたかを定量的に検討する。テキストマイニングソフトウェアのKH Coder 3（樋口，2020）を用いて分析した。

結果

基本属性

返却された有効回答のうち、身近に発達障害児者がおらず、自分自身も発達障害がない者 200 名（男性 38 名、女性 162 名；25-35 歳が 66.0%、35-45 歳が 29.0% を占める）の回答を分析対象とした。第 1 子の年齢が 2 歳以上 3 歳未満の者が 162 名（81.0%）、1 歳 6 ヶ月以上 2 歳未満の者が 38 名（19.0%）であった。発達障害をどの程度知っているかについての質問（3 件法）に対して、「人に説明できるくらい知っている」と回答した者は 34 名（17.0%）、「人に説明できるほどには知らない」者は 165 名（82.5%）、「「発達障害」という言葉を聞いたことがなかった」者は 1 名（0.5%）であった。

各条件の資料を読んだ実験参加者は、具体性高・関わり有り条件、具体性高・関わり無し条件、具体性低・関わり有り、具体性低・関わり無し条件の順に、44 名、53 名、50 名、53 名であった。この 4 群は、回答者の性別（ $\chi^2(3) = .30, p = .96$ ）、年齢（ $p = .62$, Fisher の直接確率検定）、子どもの性別（ $\chi^2(3) = 1.76, p = .62$ ）、年齢（ $\chi^2(3) = 1.88, p = .60$ ）、発達障害について知っている程度（ $p = .25$, Fisher の直接確率検定）の点で違いが認められなかったことから、4 群の等質性が確認された。

養育スタイル尺度の信頼性

肯定的働きかけ尺度、相談・つきそい尺度、叱責尺度の Cronbach の α 信頼性係数は、非特徴的わが子の場合順に、.80, .61, .78、特徴的わが子の場合順に、.83, .58, .78 であった。相談・つきそい尺度についてはやや値が低かったものの、 α 係数を低めている項目はなくまた松岡ほか（2018）や中島ほか（2012）と概ね同等の値であったことから、7 項目全てを用いることとし、これらの尺度によって、非特徴的わが子に対しても特徴的わが子に対しても、養育スタイルは適切に測定されたと判断された。そのため、本分析では各尺度の得点を実験参加者ごとに算出した。それ

ぞれの得点は値が大きいほど、肯定的働きをする／他者に相談したり子どもにつきそったりする／叱責する傾向があることを示している。

非特徴的わが子に対する養育スキル尺度得点

非特徴的わが子に対する肯定的働きかけ得点、相談・つきそい得点、叱責得点のそれぞれの平均値と標準偏差を、子どもの性別ごとに算出した（Table 2）。いずれの得点においても、子どもの性別による有意差は示されなかった（順に、 $t(198) = -1.20, p = .23$; $t(198) = -.48, p = .63$; $t(198) = 1.37, p = .17$ ）。

養育スタイルの非特徴的・特徴的子ども間比較

本研究の主たる仮説ではないものの、特徴的わが子に対して、非特徴的わが子に対するよりも、肯定的働きかけや相談・つきそいが少なく、また、叱責が多い可能性が予測された。対応のある t 検定を行った結果、非特徴的わが子と特徴的わが子の間で、肯定的働きかけ得点と相談・つきそい得点において有意差が認められ（順に、 $t(199) = 5.63, p < .001, d = .33$; $t(199) = 2.62, p < .05, d = .15$ ）、非特徴的わが子に比べて特徴的わが子には、肯定的働きかけ（非特徴的わが子 $M = 35.87, SD = 3.85$ ；特徴的わが子 $M = 34.31, SD = 3.85$ ）や、相談・つきそい（非特徴的わが子 $M = 28.31, SD = 3.34$ ；特徴的わが子 $M = 27.82, SD = 3.35$ ）が少ないことが示された。しかし、叱責得点ではこうした有意差は示されなかった（ $t(199) = -.28, p = .78$ ；非特徴的わが子 $M = 11.36, SD = 3.23$ ；特徴的わが子 $M = 11.40, SD = 3.26$ ）。

Table 2 非特徴的わが子に対する養育スタイル尺度得点

	男児 ($n = 98$)	女児 ($n = 102$)		p	d
肯定的働きかけ	35.34 (3.88)	35.99 (3.82)	$t(198) = -1.20$	.23	.17
相談・つきそい	28.19 (3.18)	28.42 (3.49)	$t(198) = -0.48$	.63	.07
叱責	11.67 (3.25)	11.05 (3.20)	$t(198) = 1.37$	.17	.19

注. 下段（ ）内は標準偏差。

特徴的わが子に対する養育スタイル

特徴的わが子に対する肯定的働きかけ得点に関する共分散分析を行った。その結果、具体性、関わり、交互作用項の効果はいずれも有意ではなかった（順に、 $F(1, 195) = .03, p = .87$; $F(1, 195) = .86, p = .36$; $F(1, 195) = .25, p = .62$ ）。

続いて、特徴的わが子に対する相談・つきそい得点に関する共分散分析を行った。その結果、具体性、関わりの効果はいずれも有意ではなかったが（それぞれ、 $F(1, 195) = .80, p = .37$; $F(1, 195) = .78, p = .38$ ）、具体性と関わりの交互作用が有意であった（ $F(1, 195) = 5.80, p < .05$ 、偏 $\eta^2 = .03$ ）。多重比較の結果4条件間に有意差は認められなかったが（Sidak 法）、具体性高・関わり無し条件の推定周辺平均値は他の条件よりも高い傾向があり、非特徴的わが子に対する相談・つきそい得点の平均値（ $M = 28.31$ ）と同程度であったが（ $M = 28.52, SE = .33$ ）、具体性高・関わり有り条件は相対的に最も低い傾向があった（ $M = 27.39, SE = .37$; Figure 1）。また具体性低の2条件

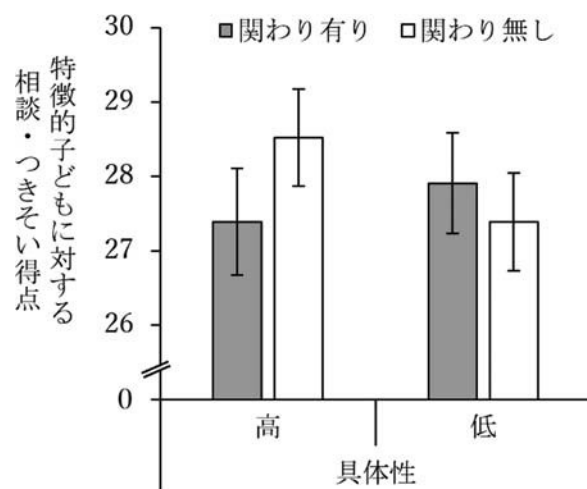


Figure 1 特徴的わが子に対する相談・つきそい得点
注. 非特徴的わが子に対する相談・つきそい得点（ $M = 28.31$ ）を基準とした得点。エラーバーは 95% CI。

はともに具体性高・関わり無し条件より低い傾向があった（具体性低・関わり有り条件、 $M = 27.91, SE = .34$ ；具体性低・関わり無し条件、 $M = 27.39, SE = .33$ ）。

特徴的わが子に対する叱責得点に関する共分散分析の結果、具体性、関わり、交互作用項の効果はいずれも有意ではなかった（順に、 $F(1, 195) = .73, p = .39$; $F(1, 195) = .34, p = .56$; $F(1, 195) = .66, p = .42$ ）。

感想文の量的概要

上述のとおり感想の記入欄は区別されていたが、例えば、文言や文章の項目に「(略) 良いところをたくさんみて育てていこうと改めて感じています。」といった本調査についての感想であり、自身の養育についての記述とも見なせる内容が含まれていたり、逆に、本調査についての感想の項目に文言や文章についての感想とも見なせる内容が含まれたりした。このことから、得られた感想文を分析のために項目別に再分類することには困難が伴い、むしろ、項目別ではなく全てをまとめて分析することによって、意識を向けた対象や感じ方における条件間の相違を明らかにしやすいと考えられたため、全てをまとめて分析することとした。

何らかの感想を記入した実験参加者の人数やその感想文全文の文字数等を Table 3 に示す。感想のうち、「特になし」等の表記も含め、何らかの記入がなされたものについて文字数を数えたところ、条件によって文字数が違う傾向があり（ $p = .08$, Kruskal-Wallis 検定）、関わり無しの2条件において、関わり有りの2条件よりも、多くの文字数で感想が書かれた傾向があった。

Table 3 自由記述の文字数

条件		記入者		文字数	
		(人)	(%)	中央値	四分位範囲
具体性高	関わり有り ($n = 44$)	42	95.5	84.50	(51.75–142.50)
	関わり無し ($n = 53$)	52	98.1	123.00	(63.75–185.75)
具体性低	関わり有り ($n = 50$)	48	96.0	76.50	(48.75–139.00)
	関わり無し ($n = 53$)	49	92.5	114.00	(76.00–166.00)

感想の内容

「発達障害」「発達障がい」「障がい」を強制抽出語とし、「子ども」「子供」「子」の表記の揺れを統一したところ、形態素分析により 14197 語が抽出された。このうち「助詞」「助動詞」を除いた 1071 種類の語を分析対象とした。

実験参加者が持った感想の内容は条件によってどのように違うかを調べるために、条件を外部変数とし、条件別にどのような語が出現したかを検討する対応分析（数量化 III 類と数理的に同等）を行なった（Figure 2）。この分析では、ある条件とその条件での感想文に特徴的に出現した語の関係、および条件間の関係を、2次元の散布図で示す。散布図の原点（0,0）付近には、出現の仕方に特徴がない語が布置され、逆に、原点から各条件の方向に離れるほど、その条件で特徴的に出現する語が布置される。

まず Figure 2 の原点付近に「人」「思う」、

「書く」、「イラスト」という語が布置された。このことはこれらの語は条件に関わらず感想文の中に出現したことを意味している。x 軸（成分 1）の正の方向に具体性高の 2 条件が互いに近い位置に、一方具体性低の 2 条件はともに負の方向に、y 軸（成分 2）に関して互いに離れた位置に布置された。これは具体性高の 2 条件の感想に特徴的に出現した語は似通っているが、それは具体性低の 2 条件とは異なっており、さらに具体性低の 2 条件の間でも異なっていることを表している。

具体性高の 2 つの条件の付近に、「子」、「発達障がい」、「自分」、「不安」、「想像」、「行動」、「気」、さらにその先に「特徴」、「子育て」、「親」、「合う」の語が布置された。これは、これらの語が両条件の感想に特徴的であることを意味している。また、具体性高・関わり無し条件は、具体性高・関わり有り条件よりも原点から離れており、さらにその先に「勉強」、「個性」、「成長」

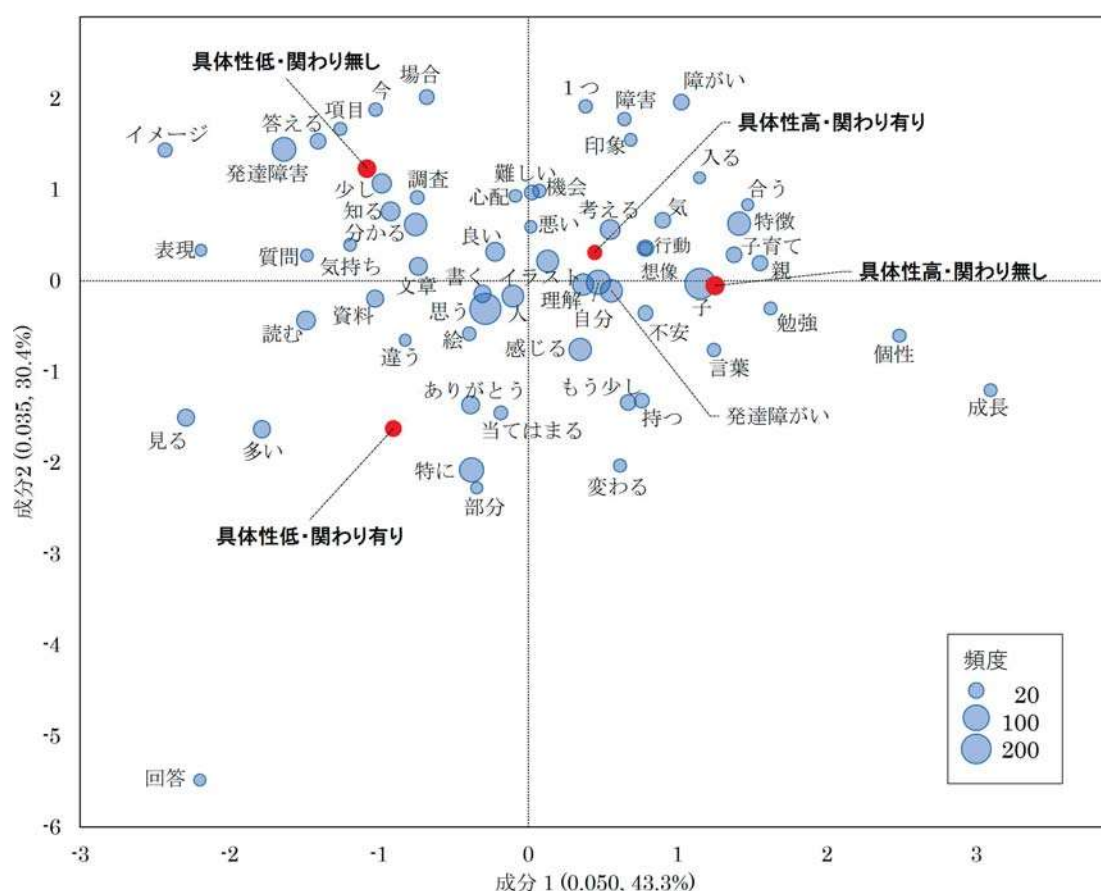


Figure 2 対応分析による語と条件の同時布置

注. バブルの大きさは各語の出現頻度で、大きいほど出現しやすかったことを示す。ここでは少なくとも 10 回出現した語を示した。

Table 4 感想の一例（部分）

条件と感想の具体例
具体性高・関わり有り条件 「自分の子にもあてはまる内容があり考えさせられました。社会の理解がないと将来、苦しい思いをするかもしれないと思うと少し不安になりました。」「2人の子供がいるので子育ては毎日戦争のようですが、これで障がいがあるのもっともっと大変になるんだろうなとちょっと心配になった。」「発達障害が特徴の1つと考えても、自分の子供にはなってはほしくないと思うことと、いろいろなタイプの人の1つだから理解していかないといけないというところのかつとうがある。」
具体性高・関わり無し条件 「自分と関係ない話ではないので、今後の子の成長の仕方を注意深くみないといけないと感じた。」「自分の子供に資料のような特徴が表れていないか気をつけて子育てしていきたいと思う。」「自分の子どもの成長をまわりの子と比べてしまったりしていたけど、人それぞれなんだよな…と考えなおした。」
具体性低・関わり有り条件 「多すぎなく、見やすいし分かりやすい。」「答えやすいアンケートです。読みやすく書かれていてスムーズに回答できました。」「5段階で解答・回答するのは難しい面があります。その時々によって状況・環境の変化が生じるので。」
具体性低・関わり無し条件 「“発達障害”という言葉は聞いたことはあっても、具体的な行動などは知らなかったので、今回資料を読むことができてよかったです。」「全体を読んで障害について少し分かった気がします。」「短いアンケートなので子供の1人あそびの間にさっと答えられて助かった。」「最近、アスペルガー等芸能人をはじめとして公表する人もいるし、ネットなどで情報があふれており、良くも悪くも発達障害が知られるようになりちょっとでも人と違うと差別されるような世の中になってしまったなあと感じる今日この頃です。」

の語が布置された。一方、具体性高・関わり有り条件から先には「考える」「障がい」「障害」の語が布置された。

Table 4に、条件別に、各条件の感想に特徴的な語を含む感想の一例を示す。具体性高の2条件に共通して、「子」、「自分」、「特徴」などの語を用いて資料内容を自身の子どもや子育てに当てはめて考えたことに関する感想が多くみられた。しかし、具体性高・関わり無し条件の感想は、子どもの「成長」を想像し養育者としての意志を固めている印象があるが、相対的に、具体性高・関わり有り条件では、「障害（障がい）」を有することによる困難を想像し相対的に悲観的になっている印象が見受けられるという、質的相違が認められる。

一方、具体性低の2条件の間には「読む」、「資料」、「思う」が布置された。これらの語は両条件に共通して出現することを意味している。

原点から具体性低・関わり有り条件の方向のさらに先に、「回答」、「見る」、「多い」の語が布置されており、このことは、これらの語がこの条件で特に多く出現したことを意味している。Table 4にあるように、これらの語を用いた感想には、

資料上の記述や質問の内容や形式を対象に述べたものが多くみられた。また具体性低・関わり有り条件の資料の付近には「特に」が布置された。「特に」は「特にありません」「特になし」という表記の中で出現しており、考えをあまり深めなかった様子がうかがえる。

第二象限にある具体性低・関わり無し条件の付近には、漢字表記の「発達障害」が布置された。このことは、具体性高の2条件の付近にはひらがな表記の「発達障がい」があることと対象的である。また、「知る」、「分かる」、「答える」、「イメージ」が具体性低・関わり無し条件の付近に布置された。これらの語を用いて、資料が分かりやすいと感じたことや、資料を読んで発達障害についての知識が増えたことなど、調査協力中や後の自分の様子についての感想が多くみられた（Table 4）。また、Table 4の最後の一例のように、自らの養育ではなく、社会の動向について俯瞰的に述べた感想が複数みられた。こうした感想は他の条件では見られなかった。

以上から、Figure 2のx軸は左から右にかけて、調査時点に限定的な内容から自分と子どもについての将来に向けた思いへの変化を表わす軸、

y 軸は下から上に向けて、現実的内容から想像上の内容への変化を表す軸と解釈できるかもしれない。

考察

相談・つきそい得点の性質

本実験では、幼児の保護者を実験参加者として発達障害の資料を読んでもらい養育スタイルを測定した。結果はまず、3、4歳になったわが子が、資料に挙げられている特徴をいくつか持っているときは、そうでないときと比べて、実験参加者による叱責は異ならないが、肯定的働きかけと相談・つきそいは有意に減ることを示した。実際の小学校低学年の発達障害児の保護者と定型発達児の保護者の養育スタイルを比較した中島ほか(2012)では、叱責と肯定的働きかけは子どもによって変わらず、相談・つきそい得点は前者のほうがより低いことを示している。本結果は、叱責と相談・つきそいに関して、中島ほか(2012)に一致する。肯定的働きかけの結果の不一致についてはさらなる検討と考察を要するが、叱責は子どもによって変わりにくく、相談・つきそいは子どもによって変わりやすい性質があると考えられる。

資料における記述方法の影響を調べた結果から、相談・つきそい得点が資料上の記述方法の影響を受けること、および、実験参加者の感想の内容が質的に異なる傾向があることが示された。本実験の4つの刺激自体の違いは誰の目にも明らかほど大きいわけではないが、これらを読んだ回答者の反応に違いがあることは軽視すべきではない。これらの結果は、わが子の障害に気づき始めた保護者が触れる、支援者や関連機関による説明の記述方法が、子どもについて他者に相談したり子どもにつきそったりするスタイルを規定する要因となることを意味している。現行の子育て支援システムでは保護者が主体的に援助要請するため、保護者が支援システムにつながるには保護者が相談・つきそいのスタイルを適切に保持していることが不可欠である。したがって、保

護者向けのメッセージにおける記述方法を自治体や支援機関が工夫することは、保護者と子育て支援システムとの確かなつながりをつくるための第一歩となると言える。

具体性と関わりの交互作用

結果は、相談・つきそい得点について、条件間の有意な差は認められないものの、資料上の具体性と関わりの交互作用があることを示した。このことから相談・つきそいに限定的に仮説は支持されたと言える。一方、叱責や肯定的働きかけに対しては資料上の記述方法の影響が認められなかった。上の議論の一部と同様に、叱責や肯定的働きかけは子どもの特徴によって変わりにくい性質があり、一方で相談・つきそいは子どもの特徴によって変わりやすいと推察される。

相談・つきそい得点は、具体性高・関わり無し条件において他の条件よりも高い傾向が認められた。以下では、資料上の記述方法が相談・つきそい得点に及ぼす影響のプロセスを、テキストマイニングの結果を手がかりにして考察する。

本研究では、回答者の自由記述を、質問の項目別ではなく全てまとめて、テキストマイニング法により分析した。これにより、各条件で回答者が何に意識を向けどのように感じたかを包括的に捉え条件間の相違を明らかにすることができた。テキストマイニングの結果は、具体性高・関わり無し条件では、実験参加者は自分の養育に意識を向け資料内容を踏まえて考えやすかった、すなわち自分事として考えやすかったことを示した。一方、具体性低の2条件ではそうした傾向はなく、実験参加者は実験の資料や質問の特徴や、調査協力中や後の自分の状態といった、調査時点に限ったものに意識を向けやすかった。また、具体性低・関わり有り条件における「特にありません」などの記述と、具体性低・関わり無し条件における社会的動向についての記述は、自らの養育に意識を向けているわけではない点で共通する。具体性低条件のように、ある人物の望ましくない行為が抽象的な語句で記述されたとき、一般に読み手は、対象人物に対する書き手の否定的態度を読み

取る (Douglas & Sutton, 2006)。したがって、具体性低の2条件の実験参加者は、書き手の否定的態度に同調的になることにより、自分の養育に意識を向けず、相談・つきそいについての意欲を低下させやすかったのかもしれない。

またテキストマイニングの結果は、具体性高・関わり無し条件の感想では子どもの成長を含めて想像している傾向があったが、対照的に、具体性高・関わり有り条件の感想は相対的に悲観的である傾向を示した。この相違は、刺激に、保護者などが発達障害児に関わろうとしているが、思ったように子どもから反応が返ってこず、子どもの行動や感情を理解しにくい状況が書かれているか否かによるものであった。子どもの行動や感情を理解しにくさは保護者のストレスになる (山根, 2013)。したがって、具体性高・関わり有り条件では、実験参加者は自分の子どもの理解しにくさを想像してそれをストレスのように感じたため、具体性高・関わり無し条件に比べて相談・つきそい得点が低下しやすかったと考えられる。この点は、大学生を対象とした長岡 (2018) では見られなかった、親子の関係性に起因すると考えられる効果である。

ところで、保護者支援の実践において、具体性高・関わり無し条件のように、支援者が保護者に、子どもの反応の分かりにくさについて伝えない方がよいというわけではないだろう。なぜなら、支援者が説明せずとも、保護者は子どもとの日々の関わりの中で遅かれ早かれ子どもの反応の分かりにくさに気づくことになるためである。これについては、従来から指摘されているように、保護者と子どものコミュニケーションについての早期からの継続的支援が欠かせないと言えよう。

資料作成における指針

以上の考察に基づき、発達障害についてまだあまり知らない保護者への対応や情報提供、資料作成の際の記述方法の指針として、以下のようにまとめることができる。これは支援の文脈において有効な指針であり、医学的、学術的文書における記述方法との区別が必要である。

1. 具体的な行動をポジティブ／ネガティブの評価を含まずに記述することは、保護者に自分自身の養育に意識を向ける、すなわち自分ごととして捉えてもらう上で有効である。
2. 具体性が高い記述で、対象児者に関わろうとする他者が存在する状況が描かれていると、相談やつきそいについての保護者の意欲を弱めてしまうことがある。そこで、早期から保護者に、子どもへの働きかけの具体的な方法や、相談・支援機関へのアクセス方法を伝えておくのが望ましい。

これら2つは長岡 (2018) で提案された指針と矛盾しない。情報提供の相手や文脈に応じて重点を変えて用いるのが望ましいであろう。

本研究の課題と展開

本研究の限界の第1は、測定された養育スタイルは、回答時のそれではなく、近い将来について想像されたものであったということである。得られた結果は、実際と大きくかけ離れているとは考えにくいものの、実際のものが測定されるのがより望ましい。

第2の課題は、発達障害についての実験参加者の知識の影響について詳細に検討できなかったことである。大学での専攻や親の教育レベル等が、大学生や母親が持つスティグマに影響することが報告されている (Öz, Yüksel, & Nasiroğlu, 2020; Someki, Torii, Brooks, Koeda, & Gillespie-Lynch, 2018)。本研究テーマにおいても、実験参加者の知識をより細かに測定して資料上の記述方法の影響との関係を調べることにより、指針の改良につながる可能性がある。

また第3の課題は、本研究で扱えたのは、保護者が発達障害について知る過程のうち、最初のごく短い時間であったということである。本実験で得られた結果が、子どもとの日々の関わりを通して、さらに、他の情報源からのさまざまな情報に触れる中で、どのように持続するかについて明らかではない。

今後これらの点を明らかにすることによって、子育て支援における支援者からの言語的表現の方

法の効果について、より正確な評価が可能となると考えられる。それによって、上述の提言も追加・修正されるべきである。

また、実際は子どもも保護者も多様であり、養育スタイルは個別性が高いため、実際の長期にわたる支援においては、対象となる子どもや保護者に合わせて個別的に言葉を選ぶことも必要である（一瀬，2012；中田，2018）。本研究結果から全般的な示唆は得られるものの、本研究は個別性を含めて検討したものではないため、今後、個別性への対応の質の向上にむけて、言語的表現についての実証的検討が展開することが望まれる。

利益相反に関する情報開示

本論文に関して、開示すべき利益相反はない。

参考文献

- Cialdini, R. B., Wosinska, W., Barrett, D. W., Butner, J., & Gornik-Durose, M. (1999). Compliance with a request in two cultures: The differential influence of social proof and commitment/consistency on collectivists and individualists. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1242-1253.
- Douglas, K. M., & Sutton, R. M. (2006). When what you say about others says something about you: Language abstraction and inferences about describers' attitudes and goals. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 500-508.
- 樋口 耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して 第2版. 京都：ナカニシヤ出版.
- 一瀬 早百合 (2012). 障害のある乳幼児と母親たち：その変容プロセス. 東京：生活書院.
- 一瀬 早百合 (2016). 障害のある子どもと保護者を支える早期療育：「障害児通所受給者証」に対する反応への認識に着目して. *田園調布学園大学紀要*, **11**, 133-149.
- 上瀬 由美子・松井 豊 (1996). 血液型ステレオタイプの変容の形：ステレオタイプ変容モデルの検証. *社会心理学研究*, **11**, 170-179.
- Krosnick, J. A. (1991). Response strategies for coping with the cognitive demands of attitude measures in surveys. *Applied cognitive psychology*, **5**, 213-236.
- Maass, A., Salvi, D., Arcuri, L., & Semin, G. R. (1989). Language use in intergroup contexts: The linguistic intergroup bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 981-993.
- 松岡 弥玲・岡田 涼・谷 伊織・大西 将史・中島 俊思・辻井 正次 (2011). 養育スタイル尺度の作成：発達的变化と ADHD 傾向との関連から. *発達心理学研究*, **22**, 179-188.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究. *社会心理学研究*, **31**, 1-12.
- 中島 俊思・岡田 涼・松岡 弥玲・谷 伊織・大西 将史・辻井 正次 (2012). 発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴. *発達心理学研究*, **23**, 264-275.
- 中田 洋二郎 (2009). 発達障害と家族支援：家族にとっての障害とはなにか. 東京：学研プラス.
- 中田 洋二郎 (2018). 発達障害のある子と家族の支援：問題解決のために支援者と家族が知っておきたいこと. 東京：学研プラス.
- Öz, B., Yüksel, T., & Nasiroğlu, S. (2020). Depression-anxiety symptoms and stigma perception in mothers of children with autism spectrum disorder. *Archives of Neuropsychiatry*, **57**(1), 50-55.
- Semin, G. R., & Fiedler, K. (1988). The cognitive functions of linguistic categories in describing persons: Social cognition and language. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 558-568.
- Someki, F., Torii, M., Brooks, P. J., Koeda, T., & Gillespie-Lynch, K. (2018). Stigma associated with autism among college students in Japan and the United States: An online training study. *Research in Developmental Disabilities*, **76**, 88-98.
- 山根 隆宏 (2013). 発達障害児・者をもつ親のストレス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, **83**, 556-565.
- 山根 隆宏 (2019). 自閉症スペクトラム障害児者をもつ親のオンラインソーシャルサポート利用の実態と関連要因. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, **13**, 73-80.

付記

本研究は JSPS 科研費（16K21502, 20K02689）の助成を受けたものである。

Effects of description types of developmental disabilities on parental child-rearing style

Chika NAGAOKA

Abstract

This research examined whether the types of linguistic descriptions of developmental disabilities affected child-rearing styles of parents with young children. The study included 200 participants whose first child was under three years of age. They were asked to read one of four types of documents about developmental disabilities (between-subject factors), that were manipulated subtly on two factors: concreteness (high/low) and descriptions of interactions between a person with developmental disabilities and other persons without disabilities (included/not included). They were next asked to imagine that their child would seem to have some of the characteristics of people with developmental disabilities in the document in the near future when their child would be three to four years old, and complete the parental child-rearing scale of a questionnaire. The results indicated a significant interaction effect between concreteness and description of interactions on the score of child-rearing for the child with characteristics similar to those described in the documents. The discussion suggests guidelines for linguistic descriptions of developmental disabilities.

【Key words】 Developmental disabilities, Parental child-rearing style, Language abstraction, Text mining technique